空間を共有する技法
― スケートスポットにおけるスケートボーダーの日常的実践 ―

桑畑　洋一郎

1　はじめに
1.1　問題の所在

スケートボードに対する社会的注目が高まっている。2021年に開催された東京オリンピックで新たに競技種目として追加され、日本人スケートボーダーがメダルを獲得した。また、2024年に開催されたパリオリンピックでも同様に、日本人スケートボーダーがメダルを獲得した。そうしたことから、「日本の新たなお家芸」ともされ（吉田 2024）[1)]、各地で公共のスケートボード施設（スケートパーク）が建設されたことにも伴い、幼児から中高年まで広い愛好者層が現れ始めている（米倉 2024）。また、2024年11月16日には、さまざまな時代の「挑戦者」（NHK 2024a）を取り上げる「群像ドキュメンタリー」（NHK 2024a）番組である、「新プロジェクト X」（NHK 2024b）においても、日本のスケートボードを下支えした人々が取り上げられ、さらに社会的に広く注目を集めることとなっている。

しかしながら、上掲の「新プロジェクト X」中でも示唆されていたように、あるいは注 1 で参照した記事にもあるように、スケートボードは元々施設内で行われるスポーツではなく、街中で行われるストリートスポーツ的な性格が強い。そうした経緯もあるため、多くのスケートボーダーは、施設だけではなく、公園や広場といった公共の空間でもスケートボードを愛好することがある。しかし、スケートパークのような施設で滑ることと、公共の空間で滑ることとでは、滑り方において、もっと具体的に言えば他のスケートボーダーと空間を共有する技法において大きな差異がある。それは、空間を他のスケートボーダーと共有する際の、規則の明示性である。

たとえば、沖縄県のうるま市にあるスケートパーク（公営）では、ヘルメットやプロテクター着用推奨の他、「施設利用者が気持ちよく利用できるよう清潔にし、ゴミは各自で持ち帰る」ことや、「独占することなく、思いやりと譲り合いの精神でモラルを守って利用」（うるま市 2024）することが明示されている。また、佐賀県唐津市にある STANCE SKATEPARK（民営）でも「使用者同士で譲り合い使用してください。（中略）使用人数が多い場合は、入場制限をする場合があります」（STANCE SKATEPARK 2024）といった明示的な規則が存在する。

一方、本稿で主たる分析対象とする空間である公園等の公共空間ではそういった規則は明示されていない。もちろん例えば、筆者が普段スケートボードを行っており、本稿で分析対象とするデータがとられた山口市の維新百年記念公園にも、「この塔の側面を使ってのスケボー・スケート禁止」といった張り紙は存在するが（桑畑 2023: 20）、こうした規則は設置物の使い方について言及するものであり、他のスケートボーダーとの空間の共有技法に関するものではない。

また、他のスケートボーダーと空間を共有するためには、やや別のものも必要となる。しばしばスケートボードは、

> 〔オリンピックの感想を聞かれた吉沢恋が：引用者注〕「少しは緊張したけれど、楽しめた方が強いかな」。スケートボードの魅力については「ほかの競技と違って、（他の選手は）ライバルだ

けど一番の友達。技を見ていて『負けちゃう』ではなく『すごいな』と出てくるところ」と話した。(『朝日新聞』2024.8.18朝刊)

とされる。競技の意味合いが強い場ですら、他のスケートボーダーは「ライバルだけど一番の友達」であり、「すごいな」が「出てくる」ことがスケートボーダーの実践では当然視される。では「すごいな」はいかに出され、それによってスケートボーダーの関係がいかに形成されていくのか。実はこの点についても、不明瞭なままである。

以上のように、とりわけ公共の空間においてスケートボードを楽しむためには、専用施設では明示されている、他のスケートボーダーやその他空間を共有する成員との、空間共有のための技法を、スケートボーダー自身も含めた成員自身が編み出していく必要があるわけである。またあるいは、他のスケートボーダーを「すごい」と認めながら楽しむための技法が必要ともされている。こうした点に、公共の空間においてスケートボードを楽しむ上での特有の実践が存在すると思われる。この、公共の空間においてスケートボードを楽しむ上での、スケートボーダーの特有の実践と、それを可能にする技法を明らかにすることこそが、本稿の目的である。

1.2　先行研究の検討と本稿の意義

では、そうしたことはいかなる意味があるのか。まずこのことを先行研究の検討を通して押さえておきたい。スケートボードをめぐる社会学的研究としては、まず田中研之輔(2006)によるエスノグラフィーが挙げられる。田中は、スケートボーダー集団へのインタビュー調査を主とした参与観察を通して、スケートボーダーたちの実態を、スケートボードの場面外の生活との関わりも含めながら明らかにしている。

また、矢部恒彦(2009, 2012)は、東京都の公園におけるスケートボーダーに注目し、スケートボーダーがいかにして公園を自らも含めた人々のものとしていくのか、その主体的な動きを、スケートボーダーらの意識調査も用いながら考察した。

さらに桑畑洋一郎(2022, 2023, 2024)は、主にスケートボーダーがスケートボードをしながら行っているミクロな実践に注目し、その社会(学)的意味を考察している。

一方海外のスケートボード研究に目を向けると、まず代表的なものとして、スケートボーダーの実践が都市の意味を変容させることを指摘した、ボーデンの著作(Borden 2001=2006)がある。また、スケートボードのみの研究ではないが、サーフィンやパルクール等ライフスタイルスポーツを実践しながら生きることの意味を、当事者のライフヒストリーを用いて分析した、ウィートンの論考がある(Wheaton 2013=2019)。

以上のようにスケートボードをめぐる社会学的研究は、とりわけ日本のものについては、それほど数があるとは言えないものの、これまでも蓄積されてきた。本稿はこうした社会学的研究の中でも、特に桑畑のこれまでの研究と同様に、スケートボーダーが行っているミクロな実践に注目するものである。

ただし一方で本稿は、田中や矢部によって指摘されたスケートボーダーがスケートボードをすることの意味を、よりミクロな点から詳細に明らかにすることを目的とする点で、従来の諸研究を相互に接合するものと言える。本稿は第1に、「スケートボーダーが空間を作り変える行為」(田中 2006: 115)、すなわち、どのようなトリックをどういった場所で行うかといった選択を通して、スケートボードがなされる公共空間の居住者として成立させていくプロセスが、スケートボーダーのミクロな

実践から展開される様子を明らかにすることを目的としている。第2に、田中が明らかにしたスケートボーダー集団内の役割や規範といった点（田中 2006: 131-54）とは異なり、スケートボーダー集団が実際に行っている相互行為とそこに潜む技法の意味を明らかにすることを目的としている。

すなわち、スケートボーダーへの意識調査を通してスケートボーダーの社会学的考察を展開した従来の研究とは異なり、スケートボーダーの楽しみの実践を可能としている技法の分析を通して、従来の研究が注目してきた論点をさらに精緻化することを目的とするものが本稿であり、本稿の意義はそこにあると思われる。なお本稿で「技法」と表現するのは、趣味や楽しみの「実践を具体的な相互行為としてとらえ、そこに用いられている方法」（秋谷ほか 2021: 2）を踏まえてのことである。すなわち本稿も、この指摘と同様、何かを楽しむという経験が、楽しむことを成立させるための種々の方法＝技法によって実現されているという前提に立つことから、こうした表現を採用することとした。

1.3　分析の対象と方法

本稿では、上記のような目的に基づき、スケートボーダーが公共の空間においてスケートボードを楽しむために編み出している、空間共有のための技法を、スケートボーダーの実践を分析しながら見ていくこととする。

具体的には、山口県山口市の維新百年記念公園に集うスケートボーダーのスケートボード実践が映されている動画データに記録された、象徴的な場面の画像と、その場面における相互行為を分析対象とする。なおこの動画データは、筆者自身が同公園においてスケートボードを楽しむ中で撮影したものである。言うならば、筆者自身の趣味実践を通した参与観察の記録を本稿では用いる。これは、柔道の試合で相手の技の展開を予期する柔道家の実践を、録画データを基に分析した海老田大五朗（2016）や、バレーボールの試合における実況解説の見る実践を分析した Akiya（2024）の方法を踏まえてのことである。動画に記録された人々の振る舞いを通して、そうした人々が行っている実践と、そこで用いられている技法を明らかにすることが可能であると考え、この方法を採用した。

動画は2021年10月から2023年3月にかけて撮影されている。これらの動画には筆者以外のスケートボーダーも撮影されている。これらのスケートボーダーたちは、筆者が動画を撮影することについて了承した上で、普段通りにスケートボードを楽しんでいる。なお、撮影についての了承はあるとは言え、スケートボーダーたちの顔は判別できないよう配慮して、本稿で用いることとする。

2　分析

ここからは、スケートボーダーが公共の空間を共有するために編み出している技法を、いくつかに類別しながら分析していくこととしたい。

2.1　トリックの順番交替と連鎖、割り込み

まずは公共の空間において複数人数でスケートボードが楽しまれる際に、スケートボーダーが実践している、トリックの順番交替と連鎖、割り込みの技法を取り上げたい。

先に見たように、スケートパークでは「譲り合い」が規則として明示されることとなっている。一方で、スケートパーク以外の公共空間では、スケートボーダーの「譲り合い」のような、楽しみ方の技法に関する規則が明示されることはほとんどない。しかしながら、公共空間で「譲り合い」のような技法が不要かといえばそういうわけでもない。公共空間であっても、使用可能な空間が限られている以上、複数名でスケートボードをするためには、例えば他のスケートボーダーと衝突するといっ

たアクシデントを避けながらスケートボードを実践する必要がある。また他にも、他のスケートボーダーがスケートボードを楽しむことを邪魔するようなことも避けなければならない。

こうした、明示されてはいないが必要となる「譲り合い」を実現するために、公共空間でスケートボーダーは、会話における順番交替の規則の一部である、交替の繰り返し（Sacks et.al 1974=2010: 35-6）と類似するかのような、トリックの順番交替と連鎖を実践する。

まずは以下の場面に注目してみたい。これは、2022年12月18日の16時25分ごろから約27分間にわたって撮影されたスケートボードの映像から切り取った断片である。映像には、筆者も含めて6人のスケートボーダーが登場するが[2)]、ここで注目するのはその内の4人（筆者含む）である。映像の後半に見られたある場面でのやり取りを以下引用する。

断片1

01 （筆者とA、5メートルほどの間隔を取って立っている。そこにBがF/S180kick flipを試みるが失敗）（※図１）
02 A：おー
03 B：ダメだー
04 A：（笑）
05 （筆者、360kickflipを試みるが失敗）
06 B：〔自分のトリック失敗について〕下に抜いたんだけど変わんなかった
07 A：あー
08 （A、F/S 180kickflipを試みるが板が回らず失敗）
09 A：（笑）
10 B：なるよね〔Aの失敗について「そうなりがちだよね」とのコメント〕
11 （A、再度F/S 180kickflipを試みるがまたも板が回らず失敗）
12 B：お、きた（笑）〔成功はしていないが冗談めかして〕
13 （B、F/S 180kickflipを試みるが惜しい失敗）
14 筆：おー
15 （B、F/S 180kickflipを試みるが惜しい失敗）
16 A：おー（スケートボードを地面に何度か叩き付けて音を出す[3)]）
17 （筆者、360kickflipを試みる）（※図２）
18 B：〔Cに〕たばこ吸うん？やめた方がいいよ
19 A：スケーターみんな吸ってる
20 C：〔Aに同意しながらBに対して〕ねえ（笑）
21 （A、Varial heelflipを試みて成功）
22 B：おーやべ、バリヒ〔Varial heelflipの略称〕
23 B：〔Cに対して〕一番説得力がないやつがね、吸いながら人にやめようって言う（笑）
24 C：あ、でも私もうやめますよ、3本あって、それが終わったら
25 （筆者、360kickflipを試みるが失敗）（※図３）
26 （A、Varial heelflipを試みて成功）（※図４）
27 B：おーやべ、バリヒ
28 C：やめんかったら、みんなが殴るって（笑）、サッカーボールにするって言われて（笑）、

怖い（笑）

29　（A、Varial heelflip を試みて成功）

30　（A、Varial heelflip を試みて成功）

31　B ：おー、うまい

32　筆：おー

33　B ：やば

34　（A、Varial heelflip を試みる、失敗して転がる）

35　B ：うーい

36　A ：あー

37　（B、Inward heelflip を試みるが失敗）

38　A ：おー、インワード〔Inward heelflip の略称〕

続いて、以上のやり取りの中から、象徴的な場面の画像を以下に掲載する。

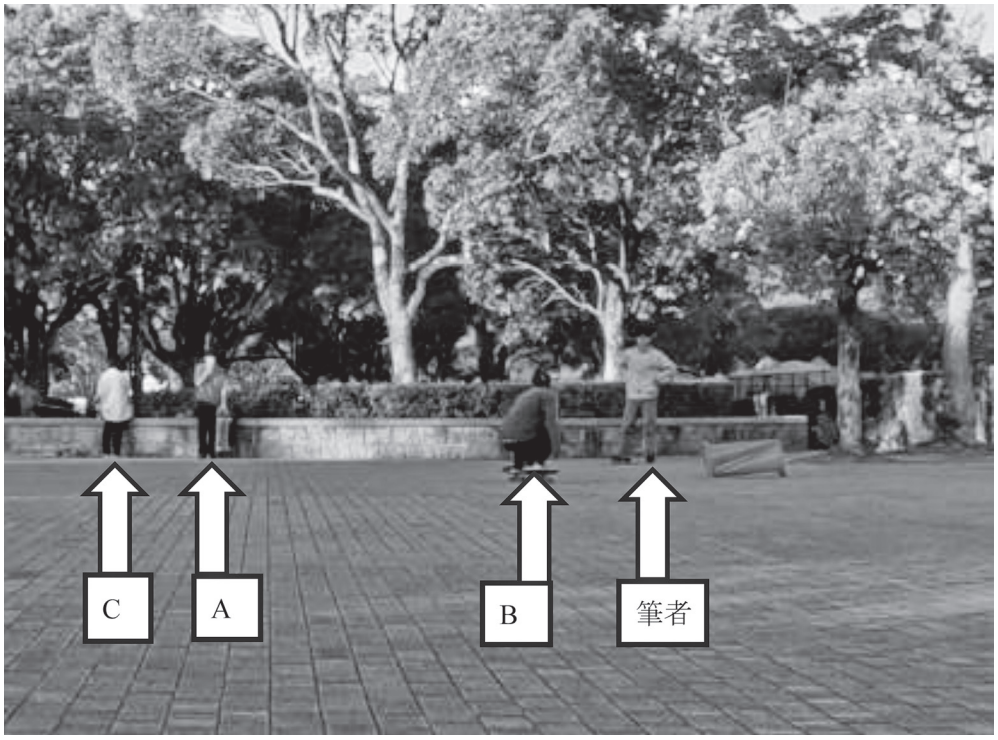

図１　01の場面

図２　17の場面

図３　25の場面

図４　26の場面

以上より、まずもって指摘できるのは、トリックの順番交替に規則性があることである。図の奥に見える植え込みからトリックを始めトリックを行ったら植え込みに戻ってくる、という手順に則り、最初にB、次に筆者、その次にA、再度B、再度筆者、再度Aという順番が、断片1内の21の時点まで続く。例えば8と11の場面や、13と15の場面のように、往路と復路で1回ずつトリックをすることもあるが、基本的にこの規則が守られている。スケートパークのように「譲り合い」が明示的に求められていなくとも、順番交替の規則が生起することとなっている[4)]。またこの交代の規則は、スケートボードの技量等で規定されているわけでもない。挑戦しているトリックの難易度で言えば、この場面ではB→A→筆者の順であるが、難しいトリックだろうとそうでなかろうと、同じ空間内で規則に則って連鎖的にトリックが出されることとなっている。順番交替の規則と、それが連鎖する規則とがここに見出せる。

しかしこうした規則的な連鎖が綻びる場面もある。図３では、本来であればAの次にトリックをするはずのBが飛ばされ、筆者が割り込んでトリックをする。これは、図２の直後より、Bが、植え込みに隣接するベンチに座りながら、ここから相互行為に参入してきたCと喫煙に関する会話をし始めたことに起因する順番の変化が生じているためであると思われる。図２を見ればBはCの方向を向いて会話をしており、ベンチに座っている。こうして、図２でトリックをした後、Bの状態とCとの会話を確認した筆者が、Bは順番交替の規則から一旦は脱落したと見なし、順番を飛ばすこととなっている。またさらには、筆者が行った順番を飛ばすという判断に違和感は生じないため、続くAもBを待つことなくトリックをしている（図４）。なおこうした割り込みという技法も、会話分析が明らかにした、会話の順序の変化（Sacks et.al 1974＝2010: 43-7）に類似するものであると思われる。

その後、Aが2回連続で同じトリックを行い成功したことにBが称賛の言葉を発する。これが、C

との喫煙に関する会話から抜け出し再度連鎖に復帰するシグナルとなり、38の場面におけるAの失敗を待って、この断片の後からBは順番交替に復帰してくることとなる。ここで見られるBの称賛の言葉は、Cとの会話を打ち切り元々のトリックの順番交替の連鎖に復帰するものとなっており、その点でやはり会話分析が明らかにしたものと同様の（高木ほか 2016: 298-300）、やり取りを区切るための資源としてBへの称賛が用いられていると思われる。

以上のように、会話分析が明らかにした会話をめぐる順番交替と連鎖の規則、あるいは交替への割り込みや、割り込みによって連鎖が綻びた際の修復といった技法と同様のことが、公共空間を共有しながらスケートボードを実践する際にも見られる。

2.2　トリックの視認

続いての技法に移りたい。次は、他のスケートボーダーのトリックを視認することによる、公共空間共有の技法である。先の順番交替と連鎖、割り込みの技法でも見られたことではあるが、複数のスケートボーダーが支障なく公共空間の共有をするためには、他のスケートボーダーのトリックを見ておく必要がある。他のスケートボーダーがどこで何をしているのか把握できており、他のスケートボーダーが入ってくる可能性がある空間的範囲を把握できていることが、衝突等を回避しながらスケートボードを楽しむ上で必要となる。そうした、他のスケートボーダーのトリックを視認する技法をここでは見ていく。

ここでも先と同様、スケートボードが実践されている場面に注目し、ここでは主に画像を基に分析を進めていきたい。

以下は2023年2月1日の12時21分ごろから約25分間にわたって撮影されたスケートボードの映像から切り取った場面である。映像には、筆者も含めてスケートボーダーが8名映っており、先の場面で登場したAとCもいる。その他の5名は先の場面では登場していない。ここではまず、筆者とAとDの3名が、縁石を用いたトリックを行っている場面から始まる。

図５　縁石でトリックをする筆者たち

ここでも先に見た順番交替と連鎖、割り込みの技法が見られ、規則に従って筆者とA、Dが交互にトリックを行っている。その際、例えば以下の図のように、自分自身がトリックを行っていない場合でも他のスケートボーダーのトリックを視認する様子が散見される。

図6　Dのトリックを見る筆者

図6の直後、Dに続いて順番通りにトリックを行うAの様子についても、筆者は視認している。

図7　Aのトリックを見る筆者

一方、筆者の右側にいる3人のスケートボーダーは、この時点で縁石を使ってトリックをしていないこともあり、A・D・筆者の様子には目を向けていない。

しかしながら次のターンが開始され、順番が回ってきた筆者がトリックを行うにあたって、右側にいた3人のスケートボーダーも視認を始める。以下の図8の通りである。

図８　筆者のトリックを見る3人

さらにこの後、別のことをしていたＤを飛ばして先にＡがトリックをし、続けてＤがトリックをする場面においても3人はそれを視認しており、ＡとＤがトリックに成功をしたため歓声を上げる。

図９　ＡとＤのトリックを見る3人

図７段階では視認を行っていなかった3人が、ターンが切り替わって視認を始めたのには理由があると思われる。この後の場面を見てみるとそのことが分かる。次の場面では、さらに次のターンに入り、筆者がトリックを行って成功し、それを見た3人が歓声を上げる。と同時に、3人の内の一番左にいたＥがスケートボードを手にし、順番に入る姿勢を取る。

図10　筆者のトリックを見る3人、その中のＥはスケートボードを手にする

すなわち、3人の内とりわけＥが視認を開始したのは、順番に加わるために適切なタイミングをうかがうためであったからだと思われる。実際に図10の筆者の後では、間髪入れずにＡがトリックをしたのでＥは順番にすぐには加われなかったものの、Ａの後にＥも縁石でトリックを始め、順番交替の連鎖に加わることとなった。図11の通りである。

図11　順番に加わるＥと、それを見るＡと筆者

またそうしたEの姿を、順番交替の連鎖に先に入っていたAと筆者が視認していることも図11からはうかがえる。先の図２・３で筆者が割り込んだ際にも、会話をするBとCの様子に対する筆者による視認がなされていたわけだが、順番交替をめぐる技法ではなく、順番交替をめぐる技法を実践するために、その前段階で、他のスケートボーダーを視認する技法が用いられているわけである。

このように、空間を共有する他のスケートボーダーたちがどこでどういうトリックを、どのような規則でしており、それにどのように参与するか／しないかを適宜適切に見図る技法が、限られた公共空間でスケートボードを実践する際には求められる。空間を皆で共有しスケートボードを実践するために、他のスケートボーダーのトリックを視認する技法が用いられることとなっている。

2.3　トリックへの評価

本稿で最後に取り上げる技法が、トリックに対する評価の技法である。すなわち、空間を共有する他のスケートボーダーが行ったトリックを評価することである。

この評価の技法については、主にトリックが成功した際やほぼ成功と判断された際、あるいは成功せずとも成功に近づいたと思われた際の称賛と、成功とは無関係になされる価値づけの2種類があると思われる。

まずは評価の技法の内、称賛を取り上げてみたい。これは要するに、トリックを成功したことを称える技法のことである。例えば、以下の断片2の場面が典型的である。以下は2022年12月20日の16時50分ごろから約25分間撮影された動画の断片とその場面の画像である。筆者と既に登場したA･B･D･Eがおり、筆者以外の4名が休憩しながら筆者のトリックを見ている場面である。

断片2

01　（筆者、それまで10分間ほど続けて試みていたB/S Slappy K-glind shovit outに成功）
02　A：おーい
03　B：わー（手にしていたカラーコーンを地面に何度か叩き付けて音を出す）
04　D：きれいだね
05　A：ちょうど動画撮ってた[5)]
06　B：まじで（筆者以外の4名がAのスマートフォンを覗きに行って動画を見る）
07　B：おお、いいっすね、いいっすね
08　（筆者も覗き込む）良かったかな
09　B：いや、いいっしょ、今のでむしろ何があるんすか（笑）
10　A・D・E：（笑）

また、01で筆者がトリックに成功した瞬間の画像が以下の図である。

図12　トリックに成功した筆者と称賛するA・B・D・E

このように、トリックを成功したことに対して周囲のスケートボーダーがそれを称賛する場面はしばしば見られる。他にも本稿で見た場面で言えば、2.2の図８・９では、A・D・筆者がトリックを成功したことに対し、画像右側にいる3人のスケートボーダーが歓声を上げ称賛の意を示していた通りである。

ただし、称賛の技法はトリックが失敗した場面でも見られる。前掲断片1中の以下の場面を見てみたい。

01　（筆者とA、5メートルほどの間隔を取って立っている。そこにBがF/S180kick flipを試みるが失敗）
02　A：おー
（中略）
13　（B、F/S 180kickflipを試みるが惜しい失敗）
14　筆：おー
15　（B、F/S 180kickflipを試みるが惜しい失敗）
16　A：おー（スケートボードを地面に何度か叩き付けて音を出す）

この場面でBはF/S180kickflipを3回試みているが、いずれも失敗している。しかしながらそれを見ていた筆者とAは「おー」と歓声を上げたり、スケートボードを叩き付けるなどして称賛の意を表している。これはすなわち、Bのトリックが成功はしなかったもののある程度成功に近づいていると判断されたがため称賛を表しているのである。なおこの場合、成功に近づくとは、“もう少しでトリックが完成する”という絶対的なものと、“そのスケートボーダーの過去の状況に比べるとトリックが上手になった”という相対的なものとがある。上掲の場面からもそのことがうかがえるが、より

分かりやすくするためにまた別の場面を見てみたい。以下は断片2と同じ日に撮影された、すなわち断片1の2日後に撮影された動画の一断片と、その場面の画像である。

断片3

01 （B、F/S180kickflip を試みるが惜しい失敗）
02 A：おー（スケートボードを地面に何度か叩き付けて音を出す）
03 筆：惜っしい
04 B：あと30度ほしいね
05 A：めっちゃ高かったっすよ

図13　断片3でBがトリックを試みている場面

断片1でも試みていたトリックである F/S180kickflip を、2日後の断片3においても B は試みており、断片1でその様子を見ていた A も筆者もそのことを把握している[6)]。ゆえに、B の F/S180kickflip が、2日前より上達しているという相対的称賛が可能になっている。また加えて、筆者が「惜っしい」と発言しているように、もう少しで成功しそうなところに達している、という絶対的称賛の要素を含んだ反応がここでなされているわけである。

一方で、成功とは無関係になされる、ゆえに称賛とはやや趣旨の違う、価値づけという評価の技法も存在する。そのことを、また別の場面から見てみたい。以下は2022年の12月19日に撮影された動画内の一断片とその場面の画像で、筆者の他に A・B・C・E がいる。筆者と B のやり取りを取り上げる。

断片4

01 （筆者360kickflip を試み、乗れたものの回転不足を無理やり補う形になる）
02 B：（笑）いやー（笑）、今のはちょっとこれ、審議っすね（笑）
03 筆：（笑）回転が足りてない（笑）
04 B：乗ったっすけどね（笑）

図14　乗れたものの回転が足りていない筆者のトリック[7)]

このように、トリックの成功か失敗かという二者択一的な評価のみならず、トリックの水準がどの程度かといった評価も行われることがある。それは「乗ったっすけどね」というBの発言にも見られよう。つまりは、乗った＝成功／乗らなかった＝失敗とはまた別の、なされたトリックと理想のトリックとの距離を基に評価する技法も存在し、それによって、なされたトリックの価値づけが行われることとなっている。なおこの価値づけの技法は、断片2におけるDの「きれいだね」や断片3におけるAの「めっちゃ高かったっすよ」にも表れている。すなわち、乗った＝成功／乗らない＝失敗ではなく、「きれい」さの水準や「高」さといった水準に照らし合わせて、トリックを価値づけする技法がここに見られる。

3　考察と課題

以上本稿では、スケートボーダーが空間を共有するために用いる技法として、第1にトリックの順番交替と連鎖、割り込みの技法、第2に視認の技法、第3に評価の技法を取り上げてきた。こうした技法が実践されることで、他のスケートボーダーと衝突するといった物理的危険性を抑えながらスケートボードを楽しむことが可能となり、また、他のスケートボーダーとの相互行為を円滑に行うことが可能となる。

また、既に本稿でもふれたように、しばしばスケートボードは、他のスケートボーダーを「ライバルだけど一番の友達」と位置づけ、相互に「すごいな」と認めることで楽しみが成立しているとされる。あるいは同様に、「結果も大事だけど、選手同士が仲良く、楽しんでやっているところがいい」（『朝日新聞』2024.9.19朝刊）といった形で捉えられてきた。スケートボードにおける「楽しみ」といった「魅力」は、本稿で取り上げた技法も含めたスケートボーダーの日常的実践によって成立している。またそうした実践が、スケートボーダーらによる公共空間の共有を可能としている。こうした、細かな実践が、空間を誰にどのように開き、空間どのような性質のものとしていくのか、そうしたことを明らかにした点で本稿は意義のあるものと思われる。

本稿では、スケートボーダーの日常的実践に見られるいくつかのミクロな技法に着目し、その意味

を明らかにした。スケートボードが社会的に注目される中でスケートボーダーがやっていることを示す意味で、また、スケートボード研究で意識調査に基づいて明らかにされてきたことをより詳細に検討する意味で、本稿は一定の意義があると思われる。

一方で本稿には課題も残る。それは、本稿が取り上げた空間が公共空間であることに起因する課題である。本稿で注目した維新百年記念公園も含めて、スケートボーダーがスケートボードを実践する公共空間には、当然ながらスケートボーダー以外の成員も多く存在する。そうした、非スケートボーダーたちが存在する場でのスケートボーダーの実践がいかに変化し、そこにどのような技法が見られるのか、この点に本稿では迫れていない。こうした、他の成員が参与してきた場面でスケートボーダーが採用する技法と、それによって公共空間の共有がいかに図られるのか、このことを明らかにすることが、本稿に残された課題であろう。

[注]

1）ただし、こうした形でオリンピックという商業主義・資本主義の象徴的なイベントに組み込まれる形や、「日本の（中略）お家芸」といった形のナショナル・スポーツ化に対しては、スケートボーダーの中でも異論はある（例えばDANCH BROADCASTING（2020）の記事などを参照のこと）が、本稿ではこうした状況への評価は行わない。

2）本稿で取り上げるスケートボーダーの内、アルファベットを用いて特に取り上げる5名について説明しておくと以下の表1の通りである。

表１　本稿で取り上げるスケートボーダー

	性別	おおよその年齢（撮影時）	備考
A	男性	10代後半	当時高校生。D・E とは旧知。
B	男性	30代半ば	当時サラリーマン。
C	女性	10代後半	当時高校生。
D	男性	10代後半	当時高校生。A・E とは旧知。
E	男性	10代後半	当時高校生。A・D とは旧知。

3）スケートボードを地面に叩き付けて賞賛の意を表明する行為。たとえばhttps://youtu.be/Qrto4ulDJTE?t=1236など参照。

4）なお紙幅の都合により本稿には掲載できないが、このような、トリックをめぐる順番交替の規則は公共空間におけるスケートボード実践では頻繁に見られる。次項で視認の技法を見るために取り上げている場面もその1つである。

5）なおこの動画は、A から譲り受けて Instagram に筆者がアップロードしたため、01から04までの場面は今でも確認可能である https://www.instagram.com/p/CmYpn8yLtMm/?locale=ja_JP。

6）ただし3名ともそれほど深い関係でもなく、筆者に関して言えば、A については名前だけ知っており、B については名前も連絡先も知らない程度の関係である。A と B 相互の関係についても、名前も連絡先も知らない程度の関係であると思われる。にもかかわらずこうした相対的称賛が成立するのは、断片1と断片2の間の2日間に限らず、この公共空間――維新百年記念公園――を、スケートボードを通して共有してきた経験がそれなり――筆者の場合は A と3年程度、B と2年程度ここでスケートボードを一緒にしてきた――にあることが理由である。

7）B は画面外にいる。

［文献］

Akiya, N., 2024, “Inferred vision: An analysis of the commentators’ descriptions of players’ visual perceptions and intentions during volleyball broadcasts”, *Discourse Studies*, 00(0): 1-19.

秋谷直矩・團康晃・松井広志編，2021，『楽しみの技法――趣味実践の社会学』ナカニシヤ出版.

Borden, Iain, 2001, *Skateboarding, Space and The City: Architecture and the Body*, London: Berg Publishers.（齋藤雅子・中川美穂・矢部恒彦訳，2006，『スケートボーディング、空間、都市』新曜社.）

DANCH BROADCASTING，2022，「スケートボードシーンにおけるオリンピックへの期待と不安」，DANCH BROADCASTING ホームページ，（2024年11月27日取得，https://danch-broadcasting.com/culture/skateboarding-olympic/2955/）.

海老田大五朗，2016，「柔道家たちの予期を可能にするもの」酒井泰斗･浦野茂･前田泰樹･中村和生･小宮友根編『概念分析の社会学2――実践の社会的論理』ナカニシヤ出版，259-78.

桑畑洋一郎，2022，「身体技法の教示と修得に関する一考察――スケートボードのハウトゥ動画を題材に」『異文化研究』16: 43-57.

――――，2023，「地方のスケートスポットはいかに形成されるか――維新百年記念公園を事例に」『やまぐち地域社会研究』20: 13-28.

――――，2024，「スケートボードの楽しみの文法――『Game of Skate』あるいは『Skate Game』を素材に」『異文化研究』18: 25-38.

NHK，2024a，「新プロジェクトX――挑戦者たち」，NHK ホームページ，（2024年11月27日取得，https://www.nhk.jp/p/ts/P1124VMJ6R/）.

――――，2024b，「スケートボード 頂点へ“日陰者”たちの逆転劇」，NHK ホームページ，（2024年11月27日取得，https://www.nhk.jp/p/ts/P1124VMJ6R/episode/te/G53Y4N8Z4P/）.

Sacks, Harvey, Emanuel A. SChegloff, G., Jefferson, 1974, “A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation”, *Language*, 50(4): 696-735.（西阪仰訳，2010，「会話のための順番交替の組織――最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集』世界思想社，7-153.）

STANCE SKATEPARK，2024，「STANCE SKATEPARK」，STANCE SKATEPARK ホームページ，（2024年11月27日取得，https://stance-sb.jp/）.

高木智世・細田由利・森田笑，2016，『会話分析の基礎』ひつじ書房.

田中研之輔，2016，『都市に刻む軌跡――スケートボーダーのエスノグラフィー』新曜社.

うるま市，2024，「スケートボード場の利用の際の注意について」，うるま市ホームページ，（2024年11月27日取得，https://www.city.uruma.lg.jp/1007004000/contents/p000051.html）.

Wheaton, Belinda, 2013, *The Cultural Politics of Lifestyle Sports*, London: Routledge.（市井吉興・松島剛史・杉浦愛監訳，2019，『サーフィン・スケートボード・パルクール――ライフスタイルスポーツの文化と政治』ナカニシヤ出版.）

矢部恒彦，2009，「東京都の公園におけるスケボー場所の調査研究――スケボー活動場所に関する研究（その1）」『日本建築学会計画系論文集』74(635): 185-92.

――――，2012，「スケーター達による公園広場の流用パーク化に関する事例的研究――スケボー活動場所に関する研究（その2）」『日本建築学会計画系論文集』77(672): 409-17.

米倉昭仁，2024，「五輪で注目“スケボー”施設、求められる『かたち』――設置自治体増加の背景、選手層の厚みを下支え」『Aera dot』，東洋経済オンラインホームページ，（2024年11月27日取得，https://toyokeizai.net/articles/-/801996）.

吉田佳央，2024,「『真面目かつ地道に練習できる国民性と相性がいい』日本のスケートボードがどんどん強くなっているワケ」，PRESIDENT Online，（2024年12月17日取得，https://president.jp/articles/-/85911）.